

基礎・基本を確実に身に付け、主体的に学ぶ子の育成

1. 研究の経緯

＜主題設定の理由＞

新学習指導要領総則

- 「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得」
- 「活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力を育成」
- 「主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実」

学習指導要領・算数編における算数科の目標

- 「基礎的・基本的な概念や性質の理解」
- 「算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度」

旭ヶ丘小学校の児童に求める力

- 身に付けた思考力，判断力，表現力
- 主体的に学習に取り組む態度を含めた学びに向かう力

新学習指導要領の全面実施を見据え，児童が基礎的・基本的な内容を理解し，主体的に学習に取り組み，日常生活の中で使える力を身につけることが大切であると考え，本主題を設定することとした。

＜本校の児童の実態から＞

本校では平成28年度から算数科の研究に取り組んできたものの，学力の二極化，下位層の増加の傾向が見られる。

また，平成31年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙より，算数への関心が全国基準より低く，学んだことを日常生活に生かしたり，活用できたりするとは思っていない実態がある。

2. 研究主題・仮説・視点

研究主題「基礎・基本を確実に身に付け，主体的に学ぶ子の育成」

「基礎・基本」とは

- ・これから先の学習において発展させていくための基になるもの

「確実に身に付ける」とは

- ・指導事項を積み重ねていけること

「主体的に学ぶ」とは

- ・「これならできるかも」「ほかの方法はないかな」「途中まではできた」という意欲をもって課題に関わっていこうとすること
- ・身に付けた基礎・基本を考える材料とし，課題を解決できること
- ・学んだ基礎・基本を日常生活に結び付けて考えること

< 研究仮説 >

子どもの実態に即し，数学的活動を工夫することで，
主体的に学ぶ児童が育つであろう

視点 1

児童の実態に応じた指導の

手立ての工夫

～基礎・基本を身に付ける

- ① 計画的なレディネスの把握
- ② 指導内容に応じた学習過程の工夫

視点 2

主体的な学びにつながる

指導法の工夫

～学習意欲を高める

- ① 「つかむ」段階の工夫
- ② 主体的に活動する場の設定
- ② 振り返りを生かす

3. 研究内容

< 研究内容 1 >

① 計画的なレディネスの把握

新しい単元を学習する上で，既習の学習内容がどの程度児童に身に付いているかを把握し，レディネスをそろえていくかが重要。

単元前

- ・ 単元構成や授業づくりに生かす。
- ・ 実態把握後，単元に入るまでに正答率が低かった問題の補充を行う。
- ・ 事前にレディネステストを行い，学級の傾向，個別の実態の把握をする。

※レディネステストは，「教師用指導書 ワークシート編」を基本とし，必要に応じて加除修正を加えたものを使用する。（学級・学年で作成）

※レディネステスト返却の際，習熟度別学習の希望調査の判断材料とする。

※単元以前のレディネスを知るために簡単な四則計算のテストも行う。

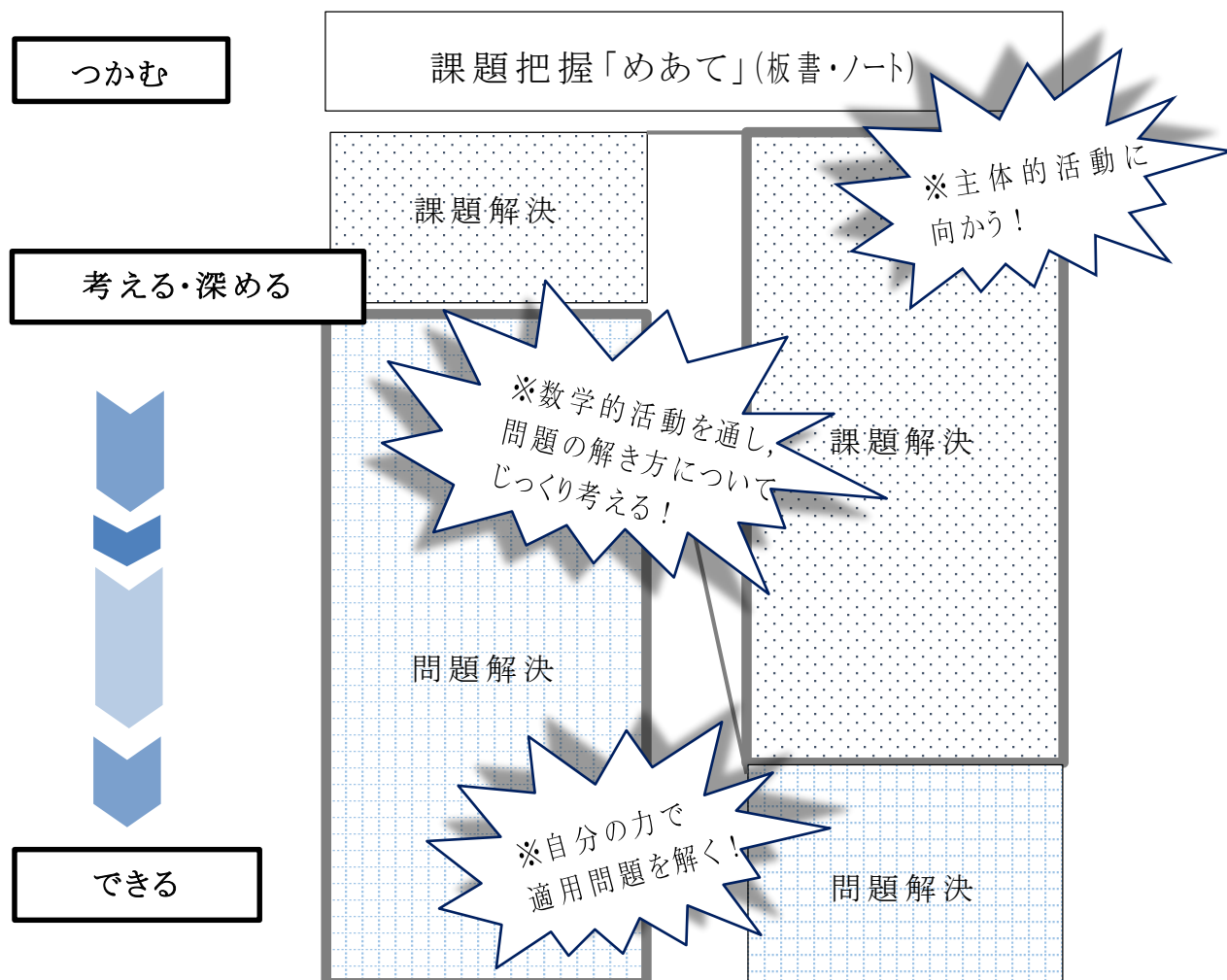
単元中→後

- ・ 本時学習に必要なレディネスを「つかむ」段階でそろえる。
- ・ 学習内容のまとめと定着のため，「前時の学習内容」と「本時の学習内容」をつなげる。

② 指導内容に応じた学習過程の工夫

< 授業の大まかな流れ >

授業を展開する上で、どこに重点を置いて取り組ませるか。



1 単位時間で・・・

何ができるようになるか、何を学ぶか、どう学ぶか・・・により

1 単位時間中に「考える・深める」と「できる」の占める割合を柔軟に変える。

※「つかむ」段階を工夫することで、児童が主体的に活動に向かうことができるようにする。

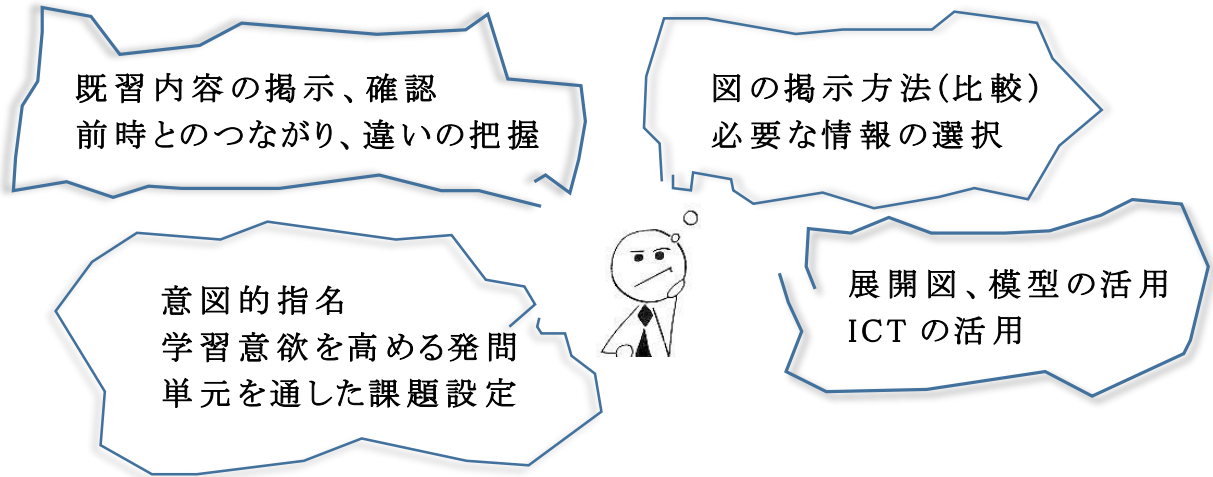
※「考える・深める」段階にかける時間を短くし、「できる」段階の時間を十分に確保し練習問題を通して定着を目指してもよいし、「考える・深める」段階に時間をかけて、数学的活動を通し問題の解き方についてじっくり考えてもよい。

※ただし、どちらの学習課程も「できる」の段階で自分の力で適用問題を解くことを原則とし、目標が達成されたかを評価する。

< 研究内容 2 >

① 「つかむ」段階の工夫（問題～課題提示の工夫）

児童がより主体的に考えられるように、自ら動き出す姿を引き出すような課題提示の工夫をする。



② 主体的に活動する場の設定

一人一人が学びの主人公として活動する場を設定する。児童の思考に沿った場の設定が望まれる。

課題が何であるかを明確にとらえ、「課題を解決したい」という思いをもつ。	既習事項との違いを進んで見つけようとする。	既習事項を基に問題解決について見通しをもとうとする。	きまりや共通点を進んで見つけようとする。
既有的知識、技能を基に思考力を駆使して課題解決に取り組む。	解決の糸口を探ろうと絵や図にして整理している。	自分なりに解決方法を選択する。	日常生活との関連を図り、算数としての問題を把握、解決しようとしている。
友達に説明したり、より分かりやすい表現をアドバイスしたりする。	考えを伝えようと言葉や数、式などを関連付けながら表現している。	数値を変えたり場面を広げたりして自ら問題を発展させている。	本時のまとめから新しい問いを見出している。

③ 「振り返り」から「授業改善」

毎時間または単元終了後の「振り返り」をすることで、児童個々の学びの深まりを目指す。

<目的>

- ・児童自らの学習状況への気付きや達成感から、今後の学習意欲を喚起させる。
- ・授業改善に生かす資料とし、今後の指導につなげる。

振り返りの効果

「わかった」
「できた」
実感

「一人でもできるかも」
自信

「他の問題もできそうだな」

意欲

振り返りの実施

1. 適用問題で確かめる。
2. 理解度を挙手・記号・マークで記入する。
3. 視点を与えて書かせる、発表させる。
 - *何が分かったか、何ができるようになったか。
 - *何に着目し、どのように考えたか。
 - *次の学習の見通しをもつ、生活とのつながりを考える。



授業改善の流れ

- 意識アンケート（児童）の実施【年間2回実施】
- 指導計画にアンケートに基づいた実施分析やレディネステストから分かることを反映。



4. 成果と課題

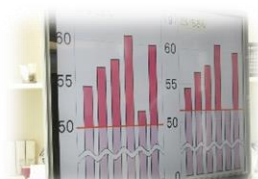
<視点1について>

- 教材・教具の工夫は、児童の興味を引くだけでなく、その後の自力解決や全体交流、適用問題の場面でも活用でき、効果的であった。

成果



- 実物投影機・タブレット・PowerPoint コンテンツなどを活用し、視覚に訴えることで、児童の思考の手助けとなり、とても効果的であった。



- 「見当を付ける」ことで見通しをもつことができ、主体的な学習へとつながっていた。

- ・ 交流では相手意識をもって伝えることを系統立てて育てていく必要がある。
- ・ 実物投影機の写し方は、全員が見やすくなるよう配慮が必要である

課題

<視点2について>

- 授業を無駄なくテンポよく進めること、メリハリのある活動があることで、児童の集中力が途切れることなく、最後まで主体的に取り組んでいた。

成果

- 交流の時間のねらいを明確化することで、交流が深まったり、自分の考えを見直したりする良い時間となった。



- ・ 単元を通して、教科書で扱う図をどのように活用し、思考の組み立てを図るかが重要である。
- ・ 自己決定できない児童への手立てを考える必要がある。

課題